可視化する音

東京藝術大学美術研究科
博士後期課程美術専攻日本画研究領域
学籍番号 1321903
島田滋

論文要旨

人の話し声、動物の鳴き声、街の騒音、世界は常に音で溢れている。音の正体とは何か。それは物体(発音体)の振動である。音(振動)が耳に入り、鼓膜を震わせ、電気信号に変換されて脳に送られ、聴覚が生じる。我々は生きている間、常に目に見えない振動を受信していることになる。音は視認することができない。視認することができないからこそ、注意力と想像力を働かせて音の正体を意識する時に、音の正体を認識できる。可視できないからこそ想像で補い、見えない物をイメージし、脳内で正体を作り出している。私は見えないものをイメージして作り出す行為は、自身の絵画を描くことに似ていると感じた。また自身の制作の中で音から感じる色やイメージ、図像などを、無意識に絵画制作に用いていたことに気づいた。

音楽は、音の波長や周波数、音の強弱や音色、リズムやテンポなどを用いて表現される。絵画は、色や形、線や質感、構図や空間などを用いて表現する。音と絵画は異なる芸術形式であるが、表現や感性においては多くの共通点がある。どちらの表現においても、共感や感情、想像が必要である。音と絵画を組み合わせることで、鑑賞者の感性をより深く刺激することができるのではないかと考えている。

音楽を聞いて映画のワンシーンが思い浮かぶ。音を聞いて思い出が蘇ることがある。過去に体験した情景や匂い温度まで感じることができる。このような経験を誰でも一度はしたことがあるだろう。そこには現実にはない美しさと儚さを感じる。音は記憶に強い影響を与えることが知られているが、それが自身の制作に大きく表れていることに気づいた。私のモチーフは、音によって想起される記憶の断片と音が作り出す形である。目には見えない音を可視化し絵画表現に転化させることで、新たな表現になるのではないかと考える。本論文では、音の絵画表現への試みを論述した。

本論文は 3 章で構成される。

第 1 章「音の輪郭」

第 1 節では、音から感じる美的感覚と、絵画から感じる美しさが似ていると感じることについて考察し、自身の幼少期の経験と、音楽のつながりについて述べた。

第 2 節では、日々の生活の中で感じる音と記憶との繋がり、視覚効果について述べる。

第 2 章「音楽の表現」

第 1 節では、音を具体的なモチーフにあてはめ可視化し、音を視覚的に理解することで、絵画表現につなげていくことができる可能性について考えた。音を可視化する様々な方法をあげ、自身の絵画表現に用いる手法と過程を述べた。

第 2 節では、音楽から感じる自身の色のイメージをまとめた。

第 3 節では、イラストやアニメ、漫画などでよく用いられる表現や効果線、オノマトペを使い、より身近な視覚的な音の表現について考察した。音を絵画として表現するために様々な方法を用いた作品例を上げながら、意味と作品の中での効果を解説した。また音をモチーフとしている作品と、自作品の中で現れる表現の違いを上げ、新たな表現を導き出せないかを考察した。

第 3 章　作品解説

第 1 節では、これまで制作してきた自作品について解説した。

第 2 節では、提出作品「sounds」を解説した。そして終章で、今後の課題と展望を述べ本論文の結びとした。